〔学術論文〕

乳児の行動のチェックリスト（IBQ-R）短縮版の作成

Development of Short Form of the Japanese Infant Behavior Questionnaire-Revised

中川　敦子・木村　由佳・鋤柄　増根
Atsuko Nakagawa　Yuka Kimura　Masune Sukigara

要旨　本研究は、The Infant Behavior Questionnaire-Revised（IBQ-R）短縮版の作成を目的として行ったものである。作成には、中川・鋤柄（2005）が作成し実施したIBQ-R日本版（全191項目、14尺度）の結果を使用した。月齢３－12ヶ月児の284名の回答結果から、各尺度６または７項目からなる14尺度の短縮版（全85項目）を作成した。短縮版の85項目中、オリジナルの短縮版（Helbig, Putnam, Gartstein & Rothbart, 2009）と重複する項目は45項目（重複率53％）であった。短縮版は十分な内的整合性を持ち、標準版とも有意な相関が見られた。また、因子分析の結果、因子パタンは標準版と同様の３因子構造が再現された。

キーワード：気質、The Infant Behavior Questionnaire-Revised、短縮版

目的

近年、生まれて間もない乳児にも気質的特徴に差がみられ、またそれらが乳幼児期を通じて一貫性を有することが明らかとなってきた。乳幼児期では発達に伴って、具体的な行動が変化する一方で、基底には一貫した気質的特徴が見出されている（栗山, 2000）。

その中で、Rothbart（1981）は行動上の個人差を生み出すものとして、神経系の反応と抑制における個人差を仮定する立場で乳児の気質測定方法を展開してきた。こうして改訂を重ねられて進展したのが、乳児の行動のチェックリストThe Infant Behavior Questionnaire-Revised（IBQ-R）であり、乳児の気質を測る上でその有用性が見込まれている。IBQ-Rは、養育者が対象児についてある場面での行動（様子）が過去1週間でどのくらいみられたかを訊く7段階評定の行動チェックリストである。IBQ-Rでは、以下の14の気質次元をしめす尺度が想定されている：①活動性のレベルActivity level（Al）②制限された時の負の情動の表出Distress to Limitation（Dl）③恐れFear（Fe）④注意の持続Duration of Orienting（Do）⑤微笑みと笑いSmile and Laughter（Sl）⑥強い刺激を好むHigh Intensity Pleasure（Hp）⑦穏やかな刺激を好むLow Intensity Pleasure

(Lp) ⑧なだめやすさSoothability (So) ⑨不機嫌からの回復のしやすさFalling Reactivity/Rate of Recovery from Distress (Fr) ⑩接触を好むCuddliness (Cu) ⑪知覚的敏感さPerceptual Sensitivity (Ps) ⑫悲しみSadness (Sa) ⑬期待して接近するApproach (Ap) ⑭声による反応性Vocal Reactivity (Vr)。IBQ-R日本版に関しては中川・鋤柄(2005)が作成・検討している。

IBQ-Rは全191の質問項目から構成されているため、完全回答までに約1時間程度が必要であり、回答者の負担が大きい。簡便に使用できる尺度があれば、その活用範囲が広がることが期待される。そこで本研究ではIBQ-R短縮版を作成することを目的とする。

短縮版の作成

中川・鋤柄(2005)の結果に基づき、IBQ-R短縮版を作成した結果を報告する。

方法

質問紙　IBQ-R日本版は14尺度についてそれぞれ11~18項目の具体的な行動記述から構成されており、合計191項目からなる。項目番号はオリジナルと同じである。教示は"それぞれの場面での様子が、この1週間(一部については2週間)にどのくらいお子さんにみられたかをお答えください。評定は'全く見られなかった'から'いつも見られた'までの7段階です。該当する場面を経験しなかった場合は、×に印をつけてください。"各人の14尺度値は、各尺度の合計点を回答項目数で割り算出する。

調査協力者　2001年3月に名古屋市3区(名東、天白、南)の3ヶ月健診を受診した455名の養育者と子育てサークル(瑞穂区)に通う0歳児84名の養育者に質問紙が配布された。質問紙はすべて郵送によって回収し、全体で60.0%が回収された。そのうち以下のいずれかに該当するものは分析から除外した。出生体重が2500g未満および4000g以上、在胎期間37週未満42週以上、出産時に何らかの異常が見受けられたもの、保育園に預けられているもののいずれかである。最後の条件は日中の乳児の様子を把握している者が回答者としてより望ましいために付加した。最終的に284名が分析対象となり、月齢3 - 6ヶ月児97名(男児58、女児39)、6 - 9ヶ月児79名(男児40、女児39)、9 - 12ヶ月児108名(男児57、女児51)であった。また、第1子59.9%、第2子31.7%、第3子以降8.5%であった。

短縮版作成手順　短縮版に採用する項目を選定するために、Putnam & Rothbart (2006)と同様の手順を行った。初めに全データを用いて、各気質次元の尺度得点と項目の評定値との相関係数を算出した。そこで、尺度ごとで相関の高い上位6項目を暫定的に短縮版項目とした。Table 1に短縮版の各尺度の相関範囲とα係数を示す。「活発さ(Al)」尺度の相関範囲は.38から.56で、6、7位が同値のため上位7項目を採用した。また、内容が日常の育児場面を反映しやすいことを基準とするため、未経験回答(該当する場面を経験しなかったとして×に印をつけた項目)が高い項目は恣意的に除外することにした。その結果、「敏感(Ps)」尺度では未経験回答41%の1項目

を取り除き繰り上げた上位６項目とした。各尺度でクロンバックのα係数を算出したところ、.50から.94となった（Table 1）。

次に、Putnam&Rothbart（2006）と同様の手順で、尺度ごとで項目を対象とした因子分析（主因子法・直接オブリミン回転）を行った。標準版の「恐れ（Fe）」尺度、「接近（Ap）」尺度は1因子構造、残りの12尺度は２因子構造を示した。例えば、標準版の「悲しみ（Sa）」尺度の因子分析の結果、第１因子には『疲れた時、泣きそうになる』といった身体の疲労などが要因で泣き出すまたはぐずる項目が、第２因子には『長い間ベビーベッドやベビーサークルにひとりぼっちにされた時、悲しむ』など親しい人の不在が原因で悲しむ項目が含まれた。このような２因子構造が短縮版の尺度でも反映されるよう、暫定的な短縮版項目を因子構造の観点から検討し、必要に応じて項目を入れ替えた。その際、項目内容の重複を避け、尺度内のα係数が.65を下回らないように注意した。その結果、「回復（Fr）」尺度については２因子にわたる項目を選定することは困難であったため、第１因子に属する項目のみを採用した。

Table 1　Item-total correlation

Scale	r	α
Activity level (Al)	.38- .56	.81
Distress to Limitations (Dl)	.45- .59	.78
Fear (Fe)	.75- .81	.94
Duration of Orienting (Do)	.41- .50	.72
Smile and Laughter (Sl)	.42- .61	.77
High Intensity Pleasure (Hp)	.55- .69	.81
Low Intensity Pleasure (Lp)	.36- .51	.72
Soothability (So)	.14- .27	.50
Falling activity / Rate of Recovery from Distress (Fr)	.47- .52	.88
Cuddliness (Cu)	.44- .54	.76
Perceptual Sensitivity (Ps)	.43- .67	.84
Sadness (Sa)	.43- .55	.76
Approach (Ap)	.68- .77	.92
Vocal Reactivity (Vr)	.42- .55	.71

結果

尺度の信頼性　14尺度それぞれについてα係数を算出したところ、.65から.94の範囲となり、内的整合性が低い尺度も含まれていた（Table 2）。.70以下の尺度は「弱刺激（Lp）」、「なだめ（So）」、「声（Vr）」であったが、その他の尺度は.70以上を示しており、一応の信頼性は満たしていると考えられる。短縮版の各尺度の内的整合性が低くなった要因としては、191項目から85項目（各尺度６または７項目）へと大幅に項目が減少しただけでなく、手続きの段階でできるだけ項目選定時に内容が重複しないように配慮したためと考えられる。また中川・鋤柄（2005）よると、IBQ-Rは行動のチェックリストという性質上必ずしも内的整合性が高くなる保証はなく、また内的整合性を高める必要のない尺度とも考えられている。

年齢差と性差　14尺度の月齢群ごとの平均値をTable 2に、男女別の平均値をTable 3に示す。月齢（3）×性（2）の2要因の分散分析の結果、月齢の高い児の得点が低い児と比べて高くなった下位尺度は、「活発さ（Al）」、「制限（Dl）」、「恐れ（Fe）」、「強刺激（Hp）」、「敏感（Ps）」、「接近（Ap）」、「声（Vr）」であった。また、これらとは逆に、「接触（Cu）」では低月齢群で得点が高くなり、「笑

い(Sl)」、「弱刺激(Lp)」、「なだめ(So)」「回復(Fr)」では6 - 9ヶ月齢群で最も得点が高くなった。標準版の結果(中川・鋤柄、2005)では、本研究とは異なり「なだめ(So)」は月齢の高い児の得点が低い児と比べて高くなる効果を認め、「回復(Fr)」では月齢の効果を認めなかった。

性差に関しては、標準版の結果と同様に「制限(Dl)」と「強刺激(Hp)」では男児の得点が高く、「恐れ(Fe)」では女児の得点が高くなった。また、月齢と性の交互作用も標準版と同様に「強刺激(Hp)」のみで認められ($F_{(2,258)}$ =4.33, p <.05)、3 - 6ヶ月群で特に性差が大きかった。

Table 2 Age comparisons

Scale	No.Items	α	3-6 (n= 97)		6-9 (n=79)		9-12 (n=108)		$F_{(2,258)}$	Short to Standard r
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
Activity level										.87
Standard	15	.80	3.50	.96	4.46	.84	4.62	.84	85.6**	
Short	7	.81	3.14	1.25	4.68	1.11	5.19	.86		
Distress to Limitations										.87
Standard	16	.82	3.50	.74	3.67	.73	4.53	.68	60.7**	
Short	6	.78	2.99	1.14	3.67	1.17	4.79	1.05		
Fear										.92
Standard	16	.92	2.45	.99	3.08	1.00	3.61	1.12	39.3**	
Short	6	.94	1.95	1.34	2.94	1.49	3.91	1.62		
Duration of Orienting										.90
Standard	12	.74	3.56	1.12	3.49	.88	3.55	.93		
Short	6	.72	3.65	1.35	3.51	1.16	3.63	1.13		
Smile and Laughter										.93
Standard	10	.75	4.23	1.07	4.74	.93	4.37	.94	7.07**	
Short	6	.77	4.08	1.26	4.61	1.20	4.10	1.19		
High Intensity Pleasure										.92
Standard	11	.73	4.37	1.25	5.67	.77	5.88	.62	104.6**	
Short	6	.81	4.59	1.37	6.14	.77	6.38	.60		
Low Intensity Pleasure										.87
Standard	13	.78	4.44	1.08	4.99	.86	4.64	.83	6.11**	
Short	6	.66	4.23	1.38	4.77	1.12	4.28	1.00		
Soothability										.72
Standard	18	.61	4.61	.89	4.88	.76	4.91	.76	3.13*	
Short	6	.65	4.47	1.21	4.92	1.24	4.89	1.21		
Falling activity / Rate of Recovery from Distress										.89
Standard	13	.80	4.45	.98	4.80	.86	4.57	.93	4.92**	
Short	6	.88	4.21	1.38	4.42	1.27	3.83	1.33		
Cuddliness										.83
Standard	17	.77	5.80	.46	5.78	.56	5.42	.63	9.57**	
Short	6	.76	6.35	.52	6.42	.54	6.01	.74		
Perceptual Sensitivity										.90
Standard	12	.82	2.75	1.23	3.83	.94	4.13	.90	69.7**	
Short	6	.84	2.43	1.46	3.88	1.23	4.48	1.19		
Sadness										.93
Standard	14	.83	3.73	1.06	3.55	.88	3.57	.86		
Short	6	.76	4.08	1.30	3.71	1.10	3.80	1.09		
Approach										.86
Standard	12	.90	2.76	1.13	4.43	1.08	5.20	.96	121.0**	
Short	6	.92	2.58	1.43	4.66	1.27	5.54	1.12		
Vocal Reactivity										.84
Standard	12	.75	3.56	1.03	3.96	.97	4.40	.84	45.3**	
Short	6	.69	3.54	1.29	4.13	1.11	4.90	1.00		

**p <.01　　*p <.05

標準版と短縮版の相関　標準版との相関を検討した。群分けは以下の手順で行った。各尺度で、標準版の尺度得点の上位から順に１位：A群、2位：B群、3位：B群、4位A群、5位A群‥‥と、成績に偏りがでないように回答者を２群に分けた。また、どちらかの群で成績が高くならないように、各尺度でA、Bの始まりを入れ替えた。こうして標準群と短縮群でマッチングを図り、標準版の尺度得点と短縮版の尺度得点の相関を算出した。.72から.93の有意な正の相関が認められた（Table 2）。

Table 3　Gender comparisons

Scale	Males (n=155) Mean	*SD*	Females (n=129) Mean	*SD*	*F*(1,258)
Al	4.39	1.38	4.30	1.42	
Dl	3.96	1.24	3.75	1.48	6.10*
Fe	2.67	1.62	3.36	1.74	11.6**
Do	3.63	1.20	3.57	1.24	
Sl	4.33	1.23	4.12	1.23	14.3**
Hp	5.85	1.12	5.53	1.39	
Lp	4.40	1.20	4.39	1.19	
So	4.72	1.26	4.81	1.20	
Fr	4.03	1.29	4.23	1.40	
Cu	6.23	.66	6.25	.62	
Ps	3.56	1.54	3.70	1.60	
Sa	3.93	1.10	3.80	1.26	
Ap	4.37	1.74	4.36	1.83	
Vr	4.18	1.26	4.26	1.28	

**p <.01　*p <.05

日米の短縮版項目の比較　本研究で得られた短縮版85項目中、Helbig et al.（2009）が作成したオリジナル短縮版の項目と重複したのは45項目であり、重複率は53％であった。各下位尺度での平均重複項目数は3.2項目であり、重複項目が最小だったのは「接触（Cu）」尺度で１項目、最多だったのが「笑い（Sl）」尺度で５項目であった。

因子分析　探索的因子分析（主因子法・直接オブリミン回転）を、短縮版の14尺度を対象に実施した。中川・鋤柄（2005）が示した３つの気質特徴に対応した因子パタンが得られるかどうかを検討するために、因子を３に指定した。その結果得られた因子パタンをTable 4に示す。第１因子（高潮性・外向性；Surgency/Extraversion）では７尺度、第２因子（負の情動性；Negative/Affectivity）では４尺度、第３因子（定位・統制；Orienting/Regulation）では３尺度となった。中川・鋤柄（2005）が得た因子パタン（Table 5）と比較すると、本研究では「声（Vr）」尺度が第１因子に属しているが標準版では第２因子に属してい

Table 4　IBQ-R Short form factor pattern

Scale	I	II	III
Ap	**.800**	.098	–.115
Al	**.716**	–.169	–.046
Dl	**.676**	.000	.285
Ps	**.668**	.226	–.190
Hp	**.629**	.360	–.144
Vr	**.577**	.281	.025
Fe	**.544**	–.076	.054
Lp	.060	**.653**	.020
Sl	.032	**.628**	.058
Do	.083	**.354**	–.003
Cu	–.236	**.303**	–.159
Sa	–.050	.267	**.836**
Fr	–.198	.198	**–.405**
So	.101	.131	**–.334**
λ	4.080	2.176	1.319
r between the factors		I	II
	II	.179	
	III	.920	–.279

る。それ以外の13尺度は標準版と同様の因子に属する結果となった。したがって、本研究では中川・鋤柄（2005）の因子パタンが概ね再現されたと結論することができる。

Table 5 Japanese IBQ-R factor pattern

Scale	I	II	III
Ap	**.827**	.102	−.167
Dl	**.647**	−.163	.400
Al	**.635**	−.082	−.039
Hp	**.591**	.373	−.208
Ps	**.579**	.328	−.143
Fe	**.492**	.042	.189
Sl	.055	**.747**	.012
Lp	.057	**.706**	−.055
Vr	.451	**.510**	.072
Do	−.004	**.464**	.046
Cu	−.358	**.375**	−.161
Sa	.053	.285	**.673**
Fr	−.027	.109	**−.544**
So	.131	.147	**−.366**
λ	3.247	2.701	1.487
		I	II
r between the factors	II	.252	
	III	.156	−.273

結論

本研究は、中川・鋤柄（2005）が作成・実施したIBQ-R日本版のデータを基に、その短縮版の作成を試みた。短縮版は標準版との間にr = .72 - .93の高い相関が認められ、内的整合性においても標準版と同程度と示唆された。また、因子分析の結果からは標準版と同様の３因子構造が確認され尺度のまとまりに若干の違いはあるものの、概ね標準版の因子パタンが再現されたといえる。

短縮版の因子を構成する下位尺度のまとまりを詳しく見ていくと、標準版との特に大きな違いは短縮版では第１因子（高潮性・外向性）に属している「声（Vr）」尺度が、標準版では第２因子（負の情動性）に属していることである。標準版の因子分析結果によると（Table 5）、「声（Vr）」尺度は第１因子に.451、第２因子に.510と負荷量を示しており、第１と２因子で因子負荷量にさほど差がないことがわかる。尺度内の項目数の減少により、第１因子への負荷量が高くなったと考えられる。

次に、本研究で作成されたIBQ-R短縮版とオリジナル短縮版（Helbig et al.、2009）を比較検討してみたところ、各下位尺度で3から4項目重複していた。しかし、「接触（Cu）」尺度では重複項目は1項目のみであった。オリジナル短縮版（Helbig et al.、2009）で「接触（Cu）」尺度として選定された項目（重複項目は除く）は、本研究結果では相関係数.143から.425と低い相関を示した。

本尺度は、中川・鋤柄（2005）が作成・実施したIBQ-R日本版を簡便に利用するために開発された。今後、標準版と他の指標、たとえば行動観察データなどにみとめられた関係を、本短縮版で検討するなどして、その妥当性を確かめていくことが望ましい。

引用文献

麻原きよみ・井桁しげ子　1993　幼児の発達状態と気質に関する研究―1歳6か月と3歳時点の比較―　小児保健研究、52、347-353.

Helbig, A. L., Putnam, S. P., Gartstein, M.A., & Rothbart, M. K.　2009　Development and Assessment of

Short and Very Short Forms of the Infant Behavior Questionnaire-Revised Society for Research in Child Development

栗山容子　2000　乳幼児の気質構造の分析　小児保健研究、59、417-423.

栗山容子・前川喜平・蓮見元子・星　三和子・瀬戸淳子・星　永・小田切房子・奥平洋子・若葉陽子・大伴　潔・庄司順一　2001　低体重児の気質と母親の意識・感情の発達的変化と相互関連性　小児保健研究、60、511-518.

水野里恵　2009　気質　湯川良三・高橋恵子・稲垣佳世子・平木典子・氏家達夫（編）　児童心理学の進歩　金子書房　Pp.2-26.

中川敦子・鋤柄増根　2005　乳児の行動解釈における文化差はIBQ-R日本版にどのように反映されるか　教育心理学研究、53、491-503.

Putnam, S. P., & Rothbart, M. K. 2006 Development of Short and Very Short Forms of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 87, 103-113.

Rothbart, M. K. 1981 Measurement of temperament in infancy. *Child Development*, 52, 569-578.

庄司順一　1999　子どもの気質と発達　小児保健研究、58、132-137.

武井裕子・寺崎正治・門田昌子　2007　幼児気質質問紙の試み　パーソナリティ研究、16、80-91.

付録

IBQ-R短縮版の各尺度における質問項目を、標準版の項目番号とともに以下に示す。項目番号の後ろのRは反転項目を意味する。また、オリジナル短縮版と重複する項目は項目番号の下に下線を記す。

活動性のレベル　Activity level　　オリジナル短縮版と重複する項目数：4項目

12　睡眠中、寝返りをうつ

13　睡眠中、ベビーベッド（ふとん）の中央から端のほうへ移動する

14 R　睡眠中、同じ位置で眠っている

<u>33</u>　服を着せたり脱がせたりする時、もがいたり、転げ回ろうとする

<u>112</u>　仰向けに寝かされた時、もがいたり、体の向きを変えたりする

<u>115</u>　ベビーチェアやチャイルドシートに座らされた時、腕をふりまわしたり、脚をバタバタさせたりする

<u>116</u>　ベビーチェアやチャイルドシートに座らされた時、もがいたり、体をひねったりする

制限された時の負の情動の表出　Distress to Limitation　重複項目数：4項目

17　目覚めた後、2～3分以内に誰かがこないと泣く

75　遊んでいたものを取り上げられた時、しばらく泣いたり不満そうにする

76 R　遊んでいたものを取り上げられた時、特に気にしない

93　動きを制限されるような場所（ベビーチェア、ベビーサークル、チャイルドシートなど）に置かれると抵抗する

113　何か欲しい時、欲しいものが手に入らないと、ひどく不機嫌になる

114　何か欲しい時、欲しいものが手に入らないと、かんしゃくを起こす（泣いたり、わめいたり、顔を真っ赤にする、など）

恐れ　Fear　重複項目：4項目

150　よく知らない大人と顔を合わせた時、親にしがみつく

151　よく知らない大人と顔を合わせた時、知らない人の方へどうしても行こうとしない

152　よく知らない大人と顔を合わせた時、知らない人に近づくのをためらう

153　よく知らない大人と顔を合わせた時、知らない人を受け入れない

154　よく知らない大人が何人かいる前で、親にしがみつく

164　よく知らない大人が家に来た時、その人が抱き上げようとすると泣く

注意の持続　Duration of Orienting　重複項目：3項目

46　本または雑誌に載っている絵や写真を2～5分間ずっと見ている

47　本または雑誌に載っている絵や写真を5分以上ずっと見ている

49　ひとつのオモチャやもので5～10分間遊んでいる

50　ひとつのオモチャやもので10分以上遊んでいる

91　テレビが見える場所にいると、2～5分ずっと見ている

92　テレビが見える場所にいると、5分以上見ている

微笑みと笑い　Smile and Laughter　重複項目：5項目

34　服を着せたり脱がせたりする時、ほほえんだり、笑ったりする

36　湯ぶねに入れられた時、ほほえむ

37　湯ぶねに入れられた時、笑う

40　顔を洗ってもらう時、ほほえんだり、笑ったりする

43　頭を洗ってもらう時、ほほえむ

53　遊んでいる時に声をあげて笑う

強い刺激を好む　High Intensity Pleasure　重複項目：4項目

58　くすぐられると、ほほえんだり笑ったりする

65　あなたや家族のだれかにくすぐられると喜ぶ

66　荒っぽい遊びをしてもらうと喜ぶ

78　高い高いをしてもらった時、笑う

79　いないいないばぁをしてもらった時、ほほえむ

80　いないいないばぁをしてもらった時、笑う

穏やかな刺激を好む　Low Intensity Pleasure　重複項目：3項目

59　歌を歌ってもらうと喜ぶ

60　本を読んでもらうと喜ぶ

62　絵本を見るのを楽しむ

71　ベビーベット（ふとん）の上でオモチャから出る音を聴いて喜ぶ

73　お気に入りのオモチャで静かに遊んでいる時、ベビーベット（ふとん）の上で5分以上横になって楽しんでいられる

74　お気に入りのオモチャで静かに遊んでいる時、ベビーベット（ふとん）の上で10分以上横になって楽しんでいられる

なだめやすさ　Soothability　重複項目：3項目

182 R 赤ちゃんと一緒に散歩すると、なだめるのに10分以上かかった

183　赤ちゃんにオモチャを与えると、すぐになだめることができた

185 R 赤ちゃんにオモチャを与えると、なだめるのに10以上かかった

186　赤ちゃんに何かを見せると、すぐになだめることができた

188 R 赤ちゃんに何かを見せると、なだめるのに10分以上かかった

189　赤ちゃんの体を軽くたたいたり、やさしくさすると、すぐになだめることができた

不機嫌からの回復のしやすさ　Falling Reactivity/Rate of Recovery from Distress

重複項目：4項目

21　夜、寝る時、10分以内に眠る

22 R　夜、寝る時、なかなかおとなしくならず、寝つかない

23　夜、寝る時、すぐおとなしくなり、寝つく

27　昼寝をさせる時、すぐに寝つく

28　昼寝をさせる時、すぐにおとなしくなる

29 R　昼寝をさせる時、なかなかおとなしくならない

接触を好む　Cuddliness　重複項目：1項目

124 R　ゆすられたり、抱きしめられた時、しきりに離れようとする

125 R　ゆすられたり、抱きしめられた時、抵抗して騒ぐ

126　あなたがしばらく離れていて、赤ちゃんの元に戻ってきた時、抱かれると喜ぶ

127 R　あなたがしばらく離れていて、赤ちゃんの元に戻ってきた時、近くにいることに関心を示すが、抱かれると抵抗する

128 R　あなたがしばらく離れていて、赤ちゃんの元に戻ってきた時、抱かれると不快そうにする

131　あなたのひざの上に座っている時、楽しそうにしている

知覚的敏感さ　Perceptual Sensitivity　重複項目：4項目

83　遊んでいる時、電話が鳴ると、顔をあげる

84　遊んでいる時、隣の部屋から人の声が聞こえると、顔をあげる

134　遠くで鳴っている消防車や救急車のサイレンに注意を向ける

137　頭上を通り過ぎる飛行機の音に注意を向ける

138　木の上の鳥に気づく

139　ちくちくする布地（ウールなど）を気にとめる

悲しみ　Sadness　重複項目：3項目

31　寝かせようとしても寝たがらない時、涙ぐむ

140　疲れた時、泣きそうになる

141　疲れた時、ぐずる

142　興奮した一日の終わりに、涙ぐむ

143　興奮した一日の終わりに、ぐずる

169　あなたが他のことで忙しく赤ちゃんに注意が向けられない時、泣く

期待して接近する　Approach　重複項目：4項目

85　欲しいオモチャを見かけた時、それをもらうととても興奮する

86　欲しいオモチャを見かけた時、すぐにそれを欲しがる

87　新しいオモチャを与えられた時、それをもらってとても興奮する

88　新しいオモチャを与えられた時、すぐにそれを欲しがる

97　目新しい物にとびつく

98　欲しい物を強く求める

声による反応性　Vocal Reactivity　重複項目：4項目

8　ベビーチェアで食べ物や飲み物を待っている時、呼びかけてくる

9　おかわりを待っている時、呼びかけてくる

103　あなたが発した声をまねる

146　車に乗っている時、話しているような声をあげる

147　ショッピングカートに乗っている時、話しているような声をあげる

148　あなたが話しかけた時、赤ちゃんも話しているような声をあげる